

覚一本平家物語における動詞の音便：会話文と地の文

著者	奥村 和子
引用	言語文化学研究. 日本語日本文学編. 2006, 1, p.A1-A10
URL	http://doi.org/10.24729/00002620

覚一本平家物語における動詞の音便 — 会話文と地の文 —

奥村和子

はじめに

四（五）段活用動詞に「て・た」等が続いた時、現代のように規則的な音便を起こすようになる以前の音便形と非音便形、もしくは二種類以上の音便の使い分けについては様々な考察がなされてきた。⁽¹⁾ハ行ウ音便促音便に関してはその新古、東西差、またそれに関連して近世期における発話者の位相差が言われる。マバ行ウ音便撥音便に関しては語幹末母音による使い分け、またサ行イ音便についてはアクセント、音節数による音便化の有無や、近松の文章における待遇表現的価値等が指摘されている。音便形と非音便形に関しては、このほか地の文に比して会話文に音便が現れやすい、また音便形はやや崩れた形として用いられ、敬語に音便は起きにくい、等とされることが多い。

覚一本平家物語においては、会話文における音便形、非音便形の発話者にやや偏りが見られるようであるので、本稿では地の文と会話文という観点から平家物語における動詞の音便状況をまとめておく。

1. 調査方法及び結果

『平家物語総索引』をもとに、日本古典文学大系『平家物語』⁽²⁾で四段活用動詞に「て」「たり」が接続したものについてその音便状況を調査した。「読て」等、語尾部分が表記されていないものは振り仮名があっても用例から除いている。

その結果を会話文と地の文（手紙等を含む）とに分け、それぞれの音便率（「音便を起こした用例」÷「『て』『たり』を下接する総用例数」）、非音便率を算出すると、以下の如くなる。

	非音便	音 便	合 計
会 話	233 (30%)	531 (70%)	764
地	668 (26%)	1902 (74%)	2570
合 計	901 (27%)	2433 (73%)	3334

まず言えるのは、会話文と地の文とで音便率にさほどの差が無いということ

あろう。一般に考えられるような会話文に音便が現れやすいという傾向は無く、むしろ地の文の方に若干音便が多く現れている。ここで考えなければならないのは平家物語が語りの文学であるということであって(覚一本は語り物系の詞章を持つ)、平家物語においては地の文を純粋な書き言葉と捉えることはできまい。したがって、これはあくまで覚一本(龍大本)平家物語における特徴ということになるが、会話文と地の文とで音便の割合に大きな違いは無いようである。

次に、会話文の用例を発話者の男女別に分けると下の表の如くであって、ここでは数の多寡もあるが、明らかに音便率に差が見られる。また、男性の会話における音便率は地の文のそれと似た値を示している。語り物系平家物語の地の文が話し言葉の特徴を持つとすれば、それが男性の発話と似た傾向を示していて不思議はなからう。

	非音便	音便	合計
男	180 (26%)	509 (74%)	689
女	53 (71%)	22 (29%)	75

以下、この傾向がどのような理由によるものであるのか、細かく見ていくこととする。

2. 会話文と地の文

【イ音便】

カ行	非音便	音便	ガ行	非音便	音便	サ行	非音便	音便
会話	8 (11%)	64 (89%)	会話	1 (14%)	6 (86%)	会話	75 (75%)	25 (25%)
地	29 (7%)	391 (93%)	地	0 (0%)	45 (100%)	地	297 (70%)	125 (30%)
合計	37 (8%)	455 (92%)	合計	1 (2%)	51 (98%)	合計	372 (71%)	150 (29%)

まずイ音便を起こすカガサ行動詞であるが、いずれの行も会話文と地の文とでそれほど大きな音便率の差は無いものの、会話文において非音便率が若干高くなっている、という点で共通している。ガ行では、やや会話文と地の文との音便率の開きが大きいように見えるが、これは用例数が少ないせいであって、会話文における非音便形も1例(法皇から義経への平家追討の院宣)のみである。この箇所について古典大系に掲げられた校異を見ると、すべて(高良神社本、寂光院本、高野本、西教寺文庫本、龍門文庫本)音便を起こした形になっており、ガ行での非音便例は会話文地の文を問わず、非常に珍しいものということになる。また後

に衰退することになるサ行の音便率はここでも低い、会話文と地の文との差はさほどではない。

【促音便】

タ行	非音便	音便	ラ行	非音便	音便
会話	5 (15%)	28 (85%)	会話	43 (11%)	331 (89%)
地	17 (11%)	142 (89%)	地	94 (9%)	912 (91%)
合計	22 (11%)	170 (89%)	合計	137 (10%)	1243 (90%)

促音便を起こすタラ行動詞でも、イ音便とほぼ同じく会話文と地の文にそれほどの差は無く、会話文において若干非音便率が高くなっている。

【ウ音便／促音便】

ハ行	非音便	音便	音便内訳	
			ウ音便	促音便
会話	95 (65%)	52 (35%)	38 (26%)	14 (10%)
地	202 (59%)	138 (41%)	81 (24%)	57 (17%)
合計	297 (61%)	190 (39%)	119 (24%)	71 (15%)

促音便とウ音便の両方が見られるハ行動詞は、サ行ほどではないにせよ音便率がかなり低い。その要因として挙げられるのは頻出単語「給ふ」で、その用例数はハ行非音便 297 例中半数以上を占めるが、この語は覚一本平家物語において全く音便を起こさない。ただし、この「給ふ」をすべて除いても音便率は6割程度であり、ハ行動詞がサ行以外の他行に比して音便率が低いことに変わりはない。

このハ行においても、地の文よりも会話文において非音便率が高いことは他行と同様であるが、促音便とウ音便とを比較した場合には、会話文において地の文よりもウ音便率が高い。すなわち、促音便が会話において少ないということになる。

【ウ音便／撥音便】

バ行	非音便	音便	音便内訳	
			ウ音便	撥音便
会話	2 (25%)	6 (75%)	2 (25%)	4 (50%)
地	9 (14%)	54 (86%)	19 (30%)	35 (56%)
合計	11 (15%)	60 (85%)	21 (30%)	39 (55%)

マ行	非音便	音便	音便内訳	
			ウ音便	撥音便
会話	3 (14%)	19 (86%)	6 (27%)	13 (59%)
地	20 (17%)	95 (83%)	23 (20%)	72 (63%)
合計	23 (17%)	114 (83%)	29 (21%)	85 (62%)

撥音便とウ音便とがあるバマ行動詞のうち、バ行は他行と同じく会話における音便率が地の文のそれを下回るが、マ行は各行中唯一、会話文での音便率が地の文のそれを上回っている。しかし、マ行での主たる音便である撥音便については、地の文よりも音便率が低くなっており、ウ音便が会話文に多いという点でハ行と共通する。バ行はすべての音便率が会話文において低くなる。

以上、用例の少ない行もあるが、総じて会話文と地の文とで音便率に大差は無く（やや開きがあるのはガバ行であるが、ともに総用例数の少なさによるものと考えられる）、会話文において地の文よりもやや音便率が低い。ただしハマ行、すなわちウ音便と他の音便を併用している動詞のうちバ行以外は、ウ音便については地の文よりも会話文において音便率が高く、その他の音便が地の文よりも起こりにくい、という傾向が見られる。

3. 会話文における発話者

会話文では地の文よりも音便率が下がる、その理由について考える時、合計値で見た発話者の性別による音便率の著しい差が注目される。よって、これも行ごとに偏りが無いかどうかを確認しておく。

【イ音便】

カ行	非音便	音便	ガ行	非音便	音便	サ行	非音便	音便
男	4 (6%)	62 (94%)	男	1 (17%)	5 (83%)	男	67 (73%)	25 (27%)
女	4 (67%)	2 (33%)	女	0 (0%)	1 (100%)	女	8 (100%)	0 (0%)

【促音便】

タ行	非音便	音便	ラ行	非音便	音便
男	4 (13%)	26 (87%)	男	31 (9%)	319 (91%)
女	1 (33%)	2 (67%)	女	12 (50%)	12 (50%)

イ音便、促音便ではガ行を除き全て女性の非音便率が男性のそれをかなり大幅に上回っている。ガ行は、先にも述べたように非音便形は1例のみ、校異がすべ

て音便形である後白河法皇からの院宣であって、女性の発話は『片山里』の女（緒方維義の祖先の女）の母」による音便1例のみである。

【ウ音便／促音便】

ハ行	非音便	音便	音便内訳	
			ウ音便	促音便
男	73 (60%)	52 (40%)	34 (28%)	14 (10%)
女	22 (85%)	4 (15%)	4 (15%)	0 (0%)

ハ行動詞の音便率が低いことは前述の如くだが、女性は男性より更に低く、また少ない音便がすべてウ音便であって、促音便の例は見られない。

【ウ音便／撥音便】

バ行	非音便	音便	音便内訳	
			ウ音便	撥音便
男	1 (14%)	6 (86%)	2 (29%)	4 (57%)
女	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

マ行	非音便	音便	音便内訳	
			ウ音便	撥音便
男	0 (0%)	18 (100%)	5 (28%)	13 (72%)
女	3 (75%)	1 (25%)	1 (25%)	0 (0%)

バマ行動詞においても、他行と同様、女性の音便率が低い（バ行は0%）わけだが、ここで注目されるのは、ハ行と同様に数少ない女性の音便がすべてウ音便であって、男性では優勢な撥音便が女性の発言には認められないことであろう。

以上をまとめると、ガ行を除くすべての行において女性の発話には男性に比べて非音便形が多く、またハバマ行、すなわちウ音便とそれ以外の併用される行についてはウ音便のみが用いられている、という傾向が見て取れる。また地の文と男性発話との音便率の相似も、音便率が極端な数値を示すガマ行以外の各行にわたっている。

1で示した会話文と地の文との傾向、会話文での男女別傾向は、ほぼ各行にわたって共通した傾向だということになる。

4. 会話文における女性発話者

なお、龍大本における女性の発話は対象用例 75 例中、非音便 53 例、音便 22 例としたが、この中には、「千手前の台詞の中の頼朝の台詞」「内裏女房（親範の娘）の台詞の中の重衡の台詞」「六代の母の台詞の中の六代の台詞」等、女性の発話の中で男性の発話を引用している場合があり、これを数からのぞくと、女性の発話は非音便 52 例（74%）、音便 18 例（26%）と更に音便率が低くなる。その発話者の内訳を見ると次の如くである。

非音便

六代の母 13 / 建礼門院 11 / 二位殿 8 / 阿波内侍 4 / 成経の乳母 3 / 横笛 2 / 天照大神 1 / 重衡の北の方 1 / 静御前 1 / 平家の乳母 1 / 内裏女房 1 / 内侍 1 / 六代の乳母 1 / 片山里の女 1 / 義仲の母 1 / 宿々の遊女たち 1

音便

建礼門院 4 / 阿波の内侍 3 / あやしの女童 2 / 六代の母 2 / 八条女院 1 / 小督 1 / 二位殿 1 / 百姓の妻とおぼしき女 1 / 副将の乳母 1 / 内侍 1 / 片山里の女の母 1

非音便形を用いているのは六代の母（維盛の北の方）、二位殿、建礼門院など比較的身分の高い女性の用例が多いのに対し（遊女が用いた非音便形は、その語自体が音便を起こさない「給ふ」1例である）、音便形を用いている女性としてはあやしの女童、百姓の妻とおぼしき女などが目につく。発話者の身分と音便との関係を考えたいところであるが、同じ女性が非音便と音便の両方を用いることも少なからずあり、そこに使い分けらしきものは見出しがたい。次の如く、同じ女性が同じ相手に対する同じ会話中で音便と非音便を用いている場面もしばしば存するのである。

二位殿→安徳天皇

「…先世の十善戒行の御ちからによ（ッ）て、今万乗のあるじと生れさせ給へども…西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし」
（卷十一・先帝身投）

六代の母→齊藤五・六

「…こよひかぎりの命とおもひて、いかに心ぼそかるらん。しばしもあらば、いとまこうてまいらむといひしか共…」
（卷十二・六代）

建礼門院→後白河法皇

「…播磨国明石浦について、ち（ッ）とうちまどろみてさぶらひし夢に、昔の内裏にははるかにまさりたるところに…」
（灌頂卷・六道之沙汰）

阿波内侍→後白河法皇

「…嶺にのぼりて薪をとり、谷にくだりて水をむすび、難行苦行の功によ（ッ）
て、遂に成等正覚し給ひき」（灌頂巻・六道之沙汰）

むしろ語の問題として、特に身分の低くない女性の音便に4例現れる（阿波内侍2例、建礼門院1例、二位殿1例）「依る」は音便率100%の語であり、すでに音便が一般化していたものと思われる。

また、江戸時代にまとめられたとされる尾崎家本平家正節で、上記女性の発話についてみると、全体的に音便の割合が増加する。少なくとも、覚一本と平家正節とで音便の有無が異なる場合に、音便→非音便となることは無く、正節で音便化したものばかりである。その例は、

覚一本	発話者	正節
ゆるして	二位殿	ゆるひて（1163c・白声）
したがひて	女房	したがつて（561d・口説）
おもひて	六代の母	思ヲて（796c・下ゲ）
むすびて	女院	汲んで（1315c・中ユリ）
かはりて	通盛の北の方	変つても（1056d・口説）
くだりて	阿波内侍	クダつて（1307a・指声）
のぼりて	阿波内侍	ノボツて（1307a・指声）
のりて	六代の母	乗ッて（786d・口説）
まいりて	六代の母	まいつて（786d・口説）
まいりたれ	緒方維義の祖先の女	参ッて（339a・下ゲ）
まいりたれ	横笛	参ッて侍らへ（146a・素声）

であって、ここでは発話者の身分よりも、ラ行動詞、特に「参る」という語の音便化が目立つ。

「参る」は覚一本170例中、非音便59例、音便111例（地の文で非音便43例、音便65例、会話文においては非音便16例、音便46例、うち女性6例はすべて非音便）であり、ラ行動詞としては音便率がやや低い語である。すなわち、先の「給ふ」を含め、敬語が多いことも女性の発話に非音便が多いことの一理由になっているのだが、一切音便を起こさない尊敬語「給ふ」と異なり、謙讓語の「参る」はまったく起こさないわけではない。その謙讓語の音便傾向が正節に至って著しくなったということになる。

5. 会話文における男性発話者

次に男性の発話者について見る。男性の非音便と音便の割合はそれぞれ 26%、74%で、女性のほぼ逆の割合で音便率が高い。同じ人物が両方の形を使い分けている場合がほとんどであるが、主要人物における音便と非音便との割合を非音便率の高い順に並べると下の表のようである。男性全体の平均よりも非音便形を多く用いているのは武士でない、もしくは戦闘場面以外でもよく登場する人物が目立つように思われる。逆に平均より音便率が高いのは義経、義仲など戦闘描写の多い人物であって、この他、主として戦いの場面で出てくる平教経、熊谷直実、今井四郎、梶原景季、佐々木盛綱といった人物は用例数こそそれほど多くないものの、音便形のみを用いている。

また、同じ人物が両方の音便を用いている場合について、たとえば義仲につい

	音 便	非音便	合 計
平 時 忠	6 (40%)	9 (60%)	15
北 条 時 政	3 (50%)	3 (50%)	6
藤 原 成 経	8 (53%)	7 (47%)	15
源 頼 朝	16 (57%)	12 (43%)	28
後 白 河	10 (63%)	6 (38%)	16
平 宗 盛	10 (67%)	5 (33%)	15
平 清 盛	26 (70%)	11 (30%)	37
平 重 盛	24 (73%)	9 (27%)	33
男 性 全 体	509 (74%)	180 (26%)	689
平 維 盛	9 (75%)	3 (25%)	12
源 義 経	20 (80%)	5 (20%)	25
平 重 衡	13 (81%)	3 (19%)	16
源 義 仲	20 (83%)	4 (16%)	24
梶 原 景 時	4 (80%)	1 (20%)	5
伊 勢 三 郎 義 盛	7 (88%)	1 (13%)	8
平 山 季 重	10 (91%)	1 (9%)	11
平 教 経	9 (100%)	0 (0%)	9
熊 谷 直 実	6 (100%)	0 (0%)	6
今 井 四 郎	5 (100%)	0 (0%)	5
梶 原 景 季	3 (100%)	0 (0%)	3
佐 々 木 盛 綱	3 (100%)	0 (0%)	3

て見ると、

義仲→頼朝

「(行家が) 義仲が許へおはしたるを、義仲さへすげなうもてなし申さん事、
いかんぞや候へば」 (巻七・清水冠者)

義仲→猫間中納言

「猫殿のまれまれおはみたるに、物よそへ」「いかが、けどきにおはみたるに、
さてはあるべき」 (巻八・猫間)

の如く、同じ「おはす」という動詞を頼朝相手の場合は非音便形で、猫間中納言相手の場合は音便形で用いている例が見られる。「おはす」はサ行動詞でかつ敬語という、音便を起こしにくい条件の揃った語であるが、覚一本平家物語では2例音便を起こしており、それがこの義仲の発話である。周知の如く、「猫間」は義仲の「たちゐの振舞の無骨さ、物いふ詞つづきのかたくななることかぎりな」い様子を描いた章段であって、「ことはりかな、二歳より信濃国木曾といふ山里に、三十まですみなれたりしかば、争かするべき」とその田舎者ぶりが揶揄されている。そこでのみ「おはす」の音便形が用いられていることは象徴的である。

先の女性発話者の状況とあわせて考えると、非音便形は敬語を含め、改まった場面に、音便形は勇ましい場面や、もしくは身分の高くない人物、田舎者による発話に多く見られる傾向があるのではないかと考えられる。もちろん既に音便率の高くなっている動詞が多いのであるから、音便に必ずしもそういうイメージが伴っていたとは言えないが、非音便がより改まった表現であるとすれば(そしてそれは従来の考え方からしても決して意外なことではない)、女性の発話に非音便形が多いことの理由はこのあたりに求められるのではないだろうか。

ま と め

以上見てきたことをまとめると、以下のようなになる。

- ①覚一本平家物語における動詞の音便形と非音便形は、会話文と地の文とでその割合に差があまり見られない。むしろ会話文において若干音便率の低い場合が多い。
- ②会話文においてその発話者の性別を見ると、女性話者は非音便形をとることが多い。音便形を用いる女性には身分のあまり高くない人物が目につくようであるが、ほぼ音便が一般化した語(「よる→よって」等)であれば女性も広く用いている。また、二種類の音便が見られるハバマ行において、女性の用いる音

便形はウ音便のみである。

- ③男性話者の音便率は、各行にわたって地の文のそれとほぼ同じ値を示しており、語り物系平家物語の「地の文」の特徴を考えさせる。また男性で音便形を平均より多く用いているのは、直接戦いの場に出ている人物という傾向が見られる。
- ④敬語動詞で、尊敬語である「給ふ」は音便を起こさない。「参る」等の謙讓語は多くないながらも音便を起こすが、女性は音便形を用いていない。「給ふ」と同じく尊敬語で音便を起こしにくいと考えられる「おはす」に2例見られる音便形は、義仲の田舎者ぶりを表現するために用いられたものと考えられる。

ただし、今回底本が異なることにより除外した章段の中には「祇王」があり、ここには祇王、仏御前といった女性の会話文が多く現れる。この章段における彼女たちの発話には、女性としてはやや音便形の多い傾向がある。のみならず、地の文に非音便形が多いなど、他の章段とは異なる傾向が見られるようであるが、これが底本による違いであるのか、女性の会話については白拍子という身分によるものであるのか、高野本全体との異同を見る必要があるだろう。また、同じく対象から除外した「高野御幸」には大江匡房の会話が多く含まれており、男性一般とは逆に非音便形を用いることが多い。すなわち③の傾向にあてはまるわけだが、これについても底本の違いを考慮せねばならない。いずれも諸本間での異同の検討が必要となるため、今回はとりあえず龍谷大学本平家物語における会話文と地の文に見られる動詞音便の特徴報告とする。

注

- (1) 浜田敦氏「中世の文法」『日本文法講座 3』明治書院（昭 32）／橋本四郎氏「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』（昭 37・4）／奥村三雄氏「サ行イ音便の消長」『国語国文』（昭 43・1）／柳田征司氏『室町時代の国語』東京堂出版（昭 60）／小松寿雄氏『江戸時代の国語江戸語』東京堂出版（昭 60）／坂梨隆三氏『江戸時代の国語上方語』東京堂出版（昭 62）他、『女子大文学 55、56』（平 16、17）拙稿に挙げた参考文献等参照。
- (2) その底本は覚一本系統の龍谷大学本であり、今回は一本における音便の状況を調査するため、高野本により補ったとされる「祇王」「小宰相身投」、龍門本により補ったとされる「高野御幸」は調査対象から除いた。

（おくむら かずこ・本学専任講師）